



「十歳のきみへ」を読んで

神宮前小学校 四年一組 徳淵 愛恵

「にくい相手を許す。その勇気で争いを終わらせることができます。」日野原先生のこの言葉に、私はどれだけ救われただろう。「少し早いけれど。」と、出産を間近にした母が、私に十歳の君へという本をプレゼントしてくれたのは、今年の五月だった。プレゼントされたその日に夢中で最後まで読み終わり、今でも悲しい気持ちになったり、姉妹げんかをしそうになると私は本のページを開くようになった。

私は五人兄弟の次女だ。一番下の妹はまだ赤ちゃんで、先生のおっしゃる「生まれてきたことは、それだけで素晴らしいことです。」という言葉どおり、彼女のおむつを替えたり、「あーうー。」とおしゃべりしているだけで、とても幸せな、すみきった空のような気持ちになれる。

弟や妹は、わんぱく盛りで、いたずらもたくさんするし、けんかもよくする。けんかし始めたら最後、どちらかが降参するまで叩きあったりもする。そして、私はその輪に加わることも少くない。母はその度に「なんで同じママの子なのに叩きあうの？大好きなあなたたちがいがみあっているのは、とても悲しい。」というが、それでもけんかはしばしばだった。しかし、日野原先生の言葉に、私ははっと気づかされた。叩いた妹も、叩かれた妹も弟も、同じ母から生まれた家族なの

だ。その私たちがいがみ合えば、傷つくのは何よりも母なのだ。それ以来、私は叩かれても叩き返すのをやめた。そして、妹と弟に、「大好きなママが泣いてるよ、痛いって言うてるよ。」と伝えるようになった。最近でも、やはりけんかはしてしまふ。しかし、叩きあいのけんかにならないのは、ひとえに、けんかを終わらせるのは他でもない自分自身だと教えてくれた日野原先生のおかげだ。

「たがいにゆるし合っていていける世界を、きみたちが実現してください。」と、日野原先生はおっしゃっていた。途方もない願いかもしれない。しかし、先生は私たちに、実現不可能な願いをたくしたりはしないだろう。私たちの中にある遺伝子というものが、私たちの人生そのものを決めるのであれば、到底かないっこないだろう。しかし、良いことに、私たちがどう生きるかということとは、遺伝子には決められないらしい。つまり、私たちの両親や祖父母、その何十世代も前の祖先が互いに憎しみあつたとしても、私たちにはその負の感情はかけらも受け継がれないのだ。

私は、皆が平和である世界を作るために精一杯努力をした。そして、妹や弟に、いつか生まれる私の子供や孫に、先生に教えていただいたことを伝えつづけていきたい。そのために時間をさくことは、私の命のうつわを、どれだけの素晴らしい瞬間で満たしてくれるだろうか。十歳の私は、今から楽しみでしたがない。